

## ランドスケープアーキテクトがみる「生産緑地」

工学院大学 建築学部 まちづくり学科 篠沢 健太  
しのざわ けんた

### 1. まずはじめに…

土地総合研究誌の「生産緑地特集」に私が寄稿するのは場違いであると感じている。「生産緑地」に関して多くの専門の方々が、国内外の知識から有意義な知見をご紹介されるだろう。そんななかで、私が何かを述べるなど、お叱りを受けそうな状況ではある。一度は原稿のご依頼をお断りしたが重ねてご依頼いただき、それに半ば押し切られた形で今に至っている。なおテーマは幅広く「生産緑地を巡る『都市の緑』の視点から…」ということであった。本稿では「生産緑地」についての直接の内容はほとんど触れておらず、最新の知見等を期待されている読者には、ここでお詫びしておきます。

さて、では何について述べようかと悩んだ結果、ランドスケープアーキテクトという職能の立場からみた生産緑地について述べてみたいと考えた。2023年に、私たちランドスケープアーキテクトの国際組織 IFLA のアジア太平洋地域大会が、日本で開催される予定である。そもそも私たち、ランドスケープアーキテクトとはどういう職能で、どのように、自然を、都市を捉えているのか？そしてランドスケープアーキテクトが、生産緑地に対して抱いている課題や期待と、それに関わりうる可能性とは何か？について、近年の私自身の仕事を通じてまとめることができたか…と思っている（客観的な論説というより主観的な論考とはなるが…）。

私は自分自身を、「豊富な経験や膨大な知識から議論を展開できる学識・有識者」とは少し異なると思っている。どちらかという、自らの体験を元に限られた経験と知識のなかで、工夫しながら何かを生み出すタイプであり、またこのスタンス自体がランドスケープアーキテクト的だと思っている（図面を描く場面だけでなく、会議の場においても…）。

私たちランドスケープアーキテクトが生産緑地をどう見て感じて、考えているか？については、私の体験、それは主に自分自身の成長過程での記憶と子育てを通じての体験に基づいている。横浜市郊外のゆるやかな丘陵に広がる畑や背後の雑木林、谷戸の田んぼと新興住宅地、公団住宅団地の家庭菜園、大阪府南河内のイチジク畑や奈良盆地のいちご畑脇に借りていた家庭菜園、それらの風景を思い出しながら本稿を書いている。

### 2. ランドスケープアーキテクトは「生産緑地」にスケールをみる

#### (1) 足元の視点—

さて突然だが、皆さんはケヤキをご存知だろうか。都市の中にも街路樹や公園に多く植えられ、気をつけていけば、東京でもケヤキに出会わない日はないかもしれない。コロナ禍のなか、在宅勤務が多かった日々でも、ケヤキの落ち葉が風に舞う風景にどこかで出会ったのではないだろうか。

私は大学で「環境植栽学」という授業を担当し

ている。この授業では、50種類の植物を調べてデータブックを作成する課題を出しているが、春先、西新宿周辺で植物調査、フィールドワークを行うと、ケヤキは真っ先に学生たちの目に止まり、記憶される木である。秋には、大学院の授業「環境生態学特論」で西新宿のまちに出る。少し肌寒い落葉の時期、教室を出て、半ば唐突に「ケヤキの種を探してください」という課題を出す…。さて皆さんは探し出せるだろうか？

ケヤキの種を探し出そうとすると、その過程でケヤキの落ち葉には2種類あることを知ることになる。ハラハラと舞う落ち葉のなかに、よくみると1枚ではなく、複数の葉が小さな枝について、時にくるくると回転して落ちるものを見つける。これはケヤキの「結果枝」と呼ばれるもので、種子と枝と葉が一体となって、種子の散布を助けるものである<sup>1)</sup>。1つの結果枝に数枚の葉と数粒の種子がつき、比較的風の強い日に母樹から落下し、回転しながらかなり遠くまで運ばれる。秋遅く、ケヤキの枝先には、こうした結果枝が茶色い小さな塊となって散布の時期を待っており、そして種は葉とともに車道に歩道に落ちる。これらの結果枝の多くはゴミとして集め捨てられるが、なかに幸運にも土のある植栽帯に落ちる種もある。春、植え桝には何千何万のケヤキの種子が芽生える。これもよく注意してみるとみつけることができる。でも、それらの種子から芽生えた「実生」も多くはその後、雑草として刈り取られ、「稚樹」まで成長するものは（街路はもちろん公園でも）ほとんどない。

この足元の視点は、ランドスケープアーキテクトが世界を捉える最も小さく最も身近な、日常のスケールである。しかし多くの人はこのスケールでまちに生じている街路樹の日常の生産について、ほとんど知らないのではないだろうか。生産緑地に当てはめてみたとき、私たちは足元の生産緑地が日々生産していることを忘れてしまっていないだろうか。ランドスケープアーキテクトはケヤキの落ち葉にゴミではなく生産を感じながら、清掃業者とは異なる視線から春の、秋の風景を眺め、

そしてまた「道端咲いてる雑草にも名前がある」<sup>2)</sup>ことを忘れない人たちである。

## (2) まちかどの視点—「けやき屋敷」の将来

足元を見ていた視点から目を上げるとケヤキの幹や枝が目にはいる。西新宿のケヤキたちは超高層ビル群を背負っているが、生産緑地の周辺でも、かつて屋敷林として農家屋敷の背後に育った巨大なケヤキが、生産緑地の向こうに見えるかもしれない。生産緑地はそれを営農していた農家屋敷とは無関係ではない。

東京都区内でも、こうしたかつての屋敷林の巨大なケヤキがランドマークとなり、保存樹木など地域の歴史的資源と扱われることも多い。ただしそれらは再開発や地区計画など周辺からの都市の開発圧に直面している（そもそも「生産緑地」はこうした都市の開発圧と直面するところから始まっていた）。住宅や学校・病院といった都市に必要な機能の新設・拡張に、樹林や緑地、そして農地が競合する。

こうした樹木を新たな計画に際して残せるかどうかについては、まず樹木医が病虫害の有無、成長不良、寿命や枯死などを判断する。この際、健全であるのに（あるからこそ）発達した根系が取り壊す予定の建物基礎と絡み合っているために移植が困難な場合もあれば、保全されたとしても配慮が十分でなく不用意に剪定されてしまうこともある。都内のある区の景観委員会では、こうした屋敷林のケヤキがかつて「直線状に植えられた」歴史的経緯を再認識しつつ、再開発のなかに位置づけることができないか？保全後の剪定の方法も含め鋭意努力中ではある。

## (3) 見通す視点—集落、まちの土地利用システム

生産緑地とその向こうに見える屋敷や屋敷林は、かつてこの土地の風景を形づくった営みのなかでつながっている。生産緑地の手前にある新興住宅地は、残されなかった農地が生まれ変わった姿である。

生活と計画のフリンジにおいて、都市計画は、必ずしも生産緑地の土地利用や景観、人と自然の関わり「履歴」や「意味」を必要としてこなか

った。しかしランドスケープアーキテクトは、そこに何らかの意味を求めたがる。

### 3. ランドスケープアーキテクトは「生産緑地」に歴史をみる

#### (1) 生産緑地の潜在特性

この潜在特性・ポテンシャルとは、ここでは立地の農業生産についての潜在特性、農地としての適性、言い換えれば「なぜそこが農地として利用されたのか？ 営農を続けてきたのか？」を意味する「自然立地的な」潜在特性である。「都市計画や不動産的に将来の都市の発展や経済効果が期待される」という意味でのポテンシャルではない。

私はよく、ランドスケープアーキテクトの仕事には「第三のクライアント」が存在していると考え。直接の仕事を与えてくれる第一のクライアント、生み出した空間を使ってくれる第二のクライアントに対し、その空間を支える自然の存在である。ランドスケープアーキテクトは、主題図や空中写真を用いて、まちの、そして地域を支える自然環境の構造を見出そうとする。ここではケヤキは、植物群落と立地の関係を表す指標として、あるいは植物群落が人為的影響を受けて遷移していく指標として現れてくる。

#### (2) 「生産緑地」の履歴

さらに短い、最近の「生産緑地」の時間のなかで、指定された農地がこの間何を生産し、今、何を生産しているのか？ そこに農地を残す判断はどのような人の営為によりを支えられたのか？ 研究対象としての「生産緑地」は、面積変化や緑被率など抽象的な数字に変換されて扱われることが多いかもしれないが、ランドスケープアーキテクトは地盤の高さや畝の方向、水のひき方や道路・水路との関係などやその履歴さえも無視できない。

こうした情報はネットで探るのは容易ではなく、市町村史や都市史でも記録されることが少ない。古地図や地籍図などの丁寧な読み解きと主題図とのオーバーレイ分析、あるいは（私たちの住む都市ではなじみ薄いが）「大字史」レベルの土地おおあざしの記録や地名の俗称などから、関係性を読み解かなければ

明らかにならない。私は福島の避難社会と環境世界を記録・図示する活動が続けているが<sup>3)</sup>、こうした活動はランドスケープアーキテクトの多くが得意とするところだろう。

#### (3) 「生産緑地」を語る人の存在

その際、生産緑地を「営む」人がまだいること、土地の履歴や関係性を聞き取る機会が残っていることは大変貴重だと感じている。おそらく開墾や定住の歴史、村の発展や本家分家のつながりなど、農の営みの歴史がそこには隠されているのだろう。それらのヒアリング調査を手がかりに、地域を再編することすら可能かもしれない。

一方で、都市化のなかで、農地を「生産緑地」として残した決断の背景には、所有される方の住まい方や近所付き合い、相続など、プライバシーに関わる場合も少なくない。生産緑地の将来は、都市計画や学術研究というより、まちづくりのなかで同じ地面に立って話し考える必要があるのではないか。

### 4. ランドスケープアーキテクトは「生産緑地」にランドスケープデザインをみる

#### (1) 金子みすゞ「はちと神さま」のスケール観

これまで述べてきたようにランドスケープアーキテクトは自らの仕事を、スケールを変えながら捉えているが、同時にそれをヒューマンスケールから鳥瞰図、空中写真のスケールまで「一貫して」見てもいる。詩人金子みすゞの「蜂と神さま」<sup>4)</sup>はその感性と共通する。

蜂はお花のなかに、  
お花はお庭のなかに、  
お庭は土塀のなかに、  
土塀は町のなかに、  
町は日本のなかに、  
日本は世界のなかに、  
世界は神さまのなかに。  
そうして、そうして、神さまは、  
小ちやな蜂のなかに。

足元やまちかど、まちや地域にケヤキを見つ、また雨の滴や水たまり、雨水の流れやそれが注ぐ河川にその流域に、ランドスケープアーキテクトの思いは広がり、縮んでいる。そして「生産緑地」もまた同じ様に捉え直すことができるだろう。

## (2) 存在しないものを見る

ランドスケープアーキテクトは「花のない桜を見上げて満開の日を想う職能」<sup>2)</sup>でもある。一気通貫のスケール観を通じて、それでも道端の低く仕立てられたイチジク畑の香りや菜園のソラマメの鞘が空に向かって伸びることを偶然目にした時の驚きを忘れずに、今そこにはない身体の体験を空間に実体化しようとする。この点で「評価する」研究者とも、「人と人とのつながりを生み出す」コミュニティデザイナーとも異なっているのだろう。

## (3) なぜ私はランドスケープアーキテクトになったのか？

私は、抽象的な表現で一括りに語られレッテルを貼られてしまうことへの反感とコンプレックスへの抵抗が私をランドスケープアーキテクトにしたのだと、50歳を過ぎて強く感じる。例えば、私が生まれ育った「団地」は画一的でつまらない「ダンチ」というレッテルを貼られる。団地を知らない人の視点にはそう映るのかもしれないが、団地を生活の場として育った私にとっての団地のテラスハウスは豊かで個性的であった。他の団地にも「ダンチ」というレッテルに惑わされず差異を見出せる自負が私にはある。

同様に、東日本大震災復興に関わる立場として、「ヒサイチ」と一括りで語られる東北の各地をそれぞれの土地へ、「ヒサイチ」を「被災地」にする手助けをしたいと思っている。

では生産緑地はどうか？これまで本稿では、農地としては生産緑地、法と計画と土地利用の概念では「生産緑地」とカッコ書きに区別してきたつもりである。しかし、農地としての生産緑地でも都市計画制度の「生産緑地」でもなく、将来の開発用地として抽象化されたカタカナの「セーサンリョクチ」となってしまっていないか？

2017年都市計画制度の改正により「生産緑地」

は生産緑地、農地へと立ち返る機会を得た。都市計画における「留保」期間から、本来の時の流れを取り戻し、再び土地とつながる可能性を持つようになった。横張は、「ヒトに線を引く」農地法と「土地に線を引く」都市計画法がオーバーレイされた曖昧な空間の矛盾を合法的に制御しようとしたものが生産緑地法であると説明する<sup>3)</sup>。そして「決定を留保しつつ計画する」この制度の30年間そのものも「日本的」であるとも述べていた。

「セーサンリョクチ」から「生産緑地」へ、さらに生産緑地から農地へ、戻すためにはヒトに立ち返る必要があるだろう。ランドスケープアーキテクトはその手助けができる職能の一つだろう。

## (4) 「視点の逆転、想像の飛躍」

生産緑地は、現代の学生たちには魅力的に映っているようで、卒業制作・研究で生産緑地に取り組む学生は少なくない。しかしそこには単純でない「視点の逆転、想像の飛躍」<sup>4)</sup>が必要はずだ。

先述の金子みすゞに「大漁」という詩がある。浜で大漁を祝う裏に、海中で採られた魚の葬いが行われているという、人間の視点から自然側へと大胆に転調する詩である<sup>4)</sup>。喜びには悲しみが表裏一体で存在している。生産緑地は今日新たな価値を生み出しうる魅力的な存在だが、そこにあるのは無垢の可能性ではない。これまでの苦渋の決断や周囲の批判など、視点の逆転は安易ではないが、しかし過去に囚われすぎず飛躍することも不可欠だろう。この難しい局面にこそ創造性を発揮しなければならない。

## 5. おわりにーランドスケープアーキテクトは「生産緑地」にグリーンインフラストラクチャーを見るか？

私個人としては「セーサンリョクチ」を生産緑地、農地に戻すだけでなく、さらに生産緑地をグリーンインフラストラクチャーとして位置付けられないか？とも考えている。

一ノ瀬<sup>6)</sup>は、グリーンインフラには世界的に統一された定義がまだ存在しないとした上で、アメリカ、ヨーロッパ、日本の定義を比較している。

なかでもヨーロッパでは「自然と自然のプロセスを保護・強化し、人間社会が自然から得る多くの恩恵を空間計画や土地開発に意識的に組み込むことに立脚し」「土地開発を制約するものではなく、最適な選択肢であれば自然の解決策を促進し、標準的なグレーの解決策の代替案を提供したり、補完したりすることもある」と述べる。

この考え方は、石川初<sup>7)</sup>が神山町の農家を訪れて考察した「後に分類/保留」するブリコラージュの考え方と通底するのではないか。FAB-G<sup>7)</sup>は農家や施設と同様、敷地や農地にも自然素材や資源を上手く使い、より良い代替案を具体化してきたのではないか。そう考えると、なるほど戦国武将や近世の領主が、外から資材を持ち込むのが容易ではない時代に、そこにある限られた自然資源を無駄にせず生み出した資産が、グリーンインフラストラクチュアとして映るのは当然かもしれない。ランドスケープアーキテクトにとってグリーンインフラストラクチュアも「ブリコラージュ」である。

しかし、グリーンインフラストラクチュアもまた（もともとカタカナではあるが…）カタカナ化が生じてしまいか？定義を留保したまま進められている様子に、「ビオトープ」「親水空間」「多自然型河川工法」にも感じたのと同様な不安を私は感じている。

紫外線ultra-violetと赤外線infra-redの対比のように「infra」にはすでに下から支える意味が含まれている。しかし一貫して捉え、再び身体に戻すランドスケープアーキテクトの考え方において、グリーンインフラストラクチュアは土木の下部構造とも異なった意味を持っているのではないか。構造を越えてそれを上から包み込む関係性、あるいは構造の内(Intra-)や、構造の間(inter-)を行き交う、どうしても下部には抑え込めない新たな「活動」があるように見える（※あくまで個人の感想です）。

ある友人は、「ランドスケープアーキテクトは土地に提案を『載せる』のでなく、「編み込む」職能」と語っていた。ランドスケープアーキテクトが、

人の営みと自然との関わりを「編み込む」先にはすでに歴史があり、「編み込まれた」ものを読み取っていくことも重要になる。そして人と人の新たな関係を「編む」ことも…。

宮城俊作が提案するランドスケープ・インフラストラクチュア<sup>8)</sup>の姿は、そうした多重な編み込みのなかにこそ存在するのだろう。そして生産緑地もその例外ではないだろう。

#### 参考・引用文献および補注

- 1) 星野義延(1990)「ケヤキの果実散布における風散布隊としての結果枝」、『日本生態学会誌』, 40 巻 1 号, 35~41 ページ, 日本生態学会
- 2) 秋元康作詞 (2016) : 「二人セゾン」, 樺坂 46 より
- 3) NPO 法人福島住まい・まちづくりネットワーク (2017~2021)「福島アトラス—避難 12 市町村の復興を考える基盤としての環境・歴史地図集—03~06」
- 4) 松本侑子(2022)「金子みすゞ詩集 NHK100 分 de 名著テキスト」127 ページ, NHK 出版(文中引用した詩の表記も本テキストに従った)
- 5) 横張真 (2021)「静止画から動画へ—都市計画をめぐるレイヤーリングの可能性」, 54-63 ページ, 日本都市計画学会編(2021)『都市計画の構造転換』, 鹿島出版会
- 6) 一ノ瀬友博(2022)「グリーンインフラ・生態系減災による気候変動適応策」, 『都市計画』, 71 巻 1 号, 68~71 ページ, 日本都市計画学会
- 7) 石川初 (2018)「思考としてのランドスケープ 地上学への誘い—歩くこと、見つけること、育てること」, 13-40p, LIXIL 出版
- 8) 宮城俊作 (2014)「グリーンインフラストラクチュアからランドスケープインフラストラクチュアへ—現代の都市デザインにおける「緑」の意味の転換」, 『都市緑化技術』, No. 93. 2~5 ページ, 都市緑化機構